

最澄と空海―その出逢いと訣別―

武内孝善

はじめに

延暦二十三年（八〇四）七月、時を同じくして唐にわたり、歸朝ののち、新しい佛教を提示して天台宗と眞言宗を創始したふたつの巨星、最澄と空海。最澄は天平神護二年（七六六）、空海は寶龜五年（七七四）生まれで、二人には八歳のひらきがあった。

二人が取り交わした書状は、最澄から空海にあてた二十四通、空海から最澄にあてた六通の合計三十通が現存する。これらによって、二人の交友は、大同四年（八〇九）にはじまり、弘仁七年（八一六）におわった。しかも、最初は手に手をとらんばかりに意氣投合し、きわめて親密であったけれども、

最澄と空海（武内）

（一）空海の『理趣釋經』借請拒絶、（二）泰範の歸山拒否、などが出来たあと、二人は袂を別つにいたった、とみなされてきた。最近では、二人が訣別した根本要因は、密教觀および密教受法に對する見解の相違による、といった説が有力視されつつある。とはいえ、二人が袂を別つにいたった大きな要因の一つが、『理趣釋經』の借請をめぐる問題であったことはまちがいない、と考える。

そこで、本日は「最澄と空海―出逢いと訣別」と題して、二人の出逢いと訣別の時期について、あらたに光をあててみたい。

一、最澄・空海の交友曲線

大同四年からはじまった二人の交友は、弘仁七年までは續いていた、とみなされてきた。確かに、二人が取り交わした手紙は残るけれども、そこに心が通い合っていたかといえ、私は「否」といいたい。ここで、私の考える「最澄・空海の交友曲線」をあげてみよう。



この交友曲線では、手紙がのこる大同四年から弘仁七年までを横軸とした。二人の交わりは、はじめ親密の度合いを急速に高めていき、それが最高潮に達したのが弘仁三年十一月・十二月におこなわれた高雄山寺における灌頂であった。だが、十二月十四日の胎藏灌頂の直後、二人のあいだに

微妙な心のズレ、お互いが「どうも違うぞ」といったわだかまり・不信任をもつようになった。弘仁四年の前半は、この微妙な関係も何とか保たれていたけれども、十一月末の『理趣釋經』借請をめぐる問題で、二人の不信任は一気に修復不可能なまでに大きな溝となっていた。弘仁五年以降は、まったく事務的な手紙が残るだけであり、この時代の二人には、心の通い合いはもはや感じられないのであった。

以下、二人が取り交わした手紙にもとづいて、この交友曲線を跡づけてみたい。

二、二人の出逢い

さきに、最澄と空海は、時を同じくして唐に渡ったと記したけれども、日本を出帆した延暦二十三年七月の時點での二人には、年令の差以上に大きな違いがあった。それは、官僧としてのキャリアである。

最澄は、十五歳の寶龜十一年(七八〇)十一月十日、近江國分寺にて得度して「最澄」と名のり、延暦四年(七八五)四月六日、東大寺戒壇院で具足戒をうけて正式の僧となった。入唐したときは、修行入位・内供奉十禪師で三十九歳。その資格は還學生、つまり、行ったときの遣唐使船で還ってくる

短期留學生であった。僧としての學修がほぼ完成の域に達して、その總仕上げのための入唐であり、譯語僧・義眞と從者・丹福成をともなっていた。

一方、空海は官僧になったばかりであった。すなわち、延暦二十二年（八〇三）四月七日に出家し、二日後の四月九日、東大寺戒壇院にて具足戒をうけて、正式の僧となった。この出家は、年分度者のそれではなく、留學僧として、空海を唐に派遣する船に乗せるための臨時の措置であった。留學僧とは、つぎの遣唐使船がくるまで最低でも二十年間、在唐して基礎から學修する長期の留學生であった。延暦二十三年、空海は三十一歳であった。

従來、空海が留學僧に選任されたのは、二度目の出帆が目睫にせまった延暦二十三年三月であったとみなす説が有力視されてきた。だが、關連する史料を素直によむと、右に記したように、前年の四月初旬に出家と受戒をすませ、同二十二年四月十六日に難波津を出帆した最初の遣唐使船に乗りこんでいたのであった。このことは何を意味するのか。空海が留學僧となったのは、遣唐使船が出發する直前、年分度者が得度した正月十四日から三月にかけてのことであった。このように考えてこそ、「延暦二十三年季夏之月（『六月』）に乗船した」

最澄と空海（武内）

と空海みずから記すことが、矛盾なく説明できるのである。

最澄と空海、二人が最初に出逢ったのは延暦二十三年の二度目の出帆のときであった、といわれてきた。すなわち、第一回目の遣唐使船は難波津をでてから五日目の四月二十一日、嵐に遇ったため、この年の渡海は中止となった。最澄は大宰府までたどりつき、一年間、この地で船待ちをしていた。空海は二度目の出帆の直前に官僧となり、慌ただしく遣唐使船にのりこみ大宰府にむかった。乗船したのが難波津と博多津であり、乗りこんだ船も第一船に空海、第二船に最澄と別々であったため、入唐前の二人は簡単な挨拶のことばをかわした程度であった、とみなすのが従來の大方のみかたであった。しかるに、空海は延暦二十二年四月に出帆した第一回目の船に乗りこんでいたのである。では、四月二十一日、瀬戸内海を航行中に暴風疾風にあったあと、空海はどこで何をしていったか。全く手がかりはない。翌二十三年に出發したとき、空海はいつ、どこで遣唐使船に乗ったのであろうか。従來は、五月十二日、難波津を進發したときとみなされてきた。この五月十二日は、『御遺告』の「更に發心を作して、去んじ延暦二十三年五月十二日を以って入唐す」にもとづく。ほかに

傍證がえられれば信じてよいが、そのようなものは一切ない。よつて、史料の面から、この五月十二日説を私は採らない。

空海みずからが記す乗船の日は、「延暦二十三年季夏の月」である。正式の歸國報告書である『御請來目錄』に「空海去んじ延暦廿三年季夏の月、入唐の大使藤原朝臣に隨つて、同じく第一船に上りて、咸陽に發赴す。」と記す。「季夏の月」は六月をさす。この六月とは、乗船した日時なのか、それとも唐にむけて發赴した日なのか。わが國での最終寄港地である肥前田浦を進發したのが七月六日であつたことは、遣唐大使・藤原葛野麻呂の復命書によつて明らかである。よつて、この六月は乗船の日であらう。

ではこの六月、どこで船に上つたのか。七月六日の肥前田浦を基準にして逆算すると、博多津であつたとしか考えられない。ほとんどの方は難波津で上船したとみなすけれども。根據は二つ。一つは、六月の時點で、まだ難波津にいたとすると、七月六日までに田浦に達することは、どのように考えても時間的に不可能であること。二つ目は、遣唐大使は節刀を授與されたあと、半月ほどで難波津を出發するのが恆例であつたこと、である。前例を踏襲したとすれば、三月二十八日に節刀を拜受してから二ヶ月あまりも難波津に留まつてい

たととは考え難い。すると、船に上つた六月とは、博多津以外には考えられないのである。

延暦二十三年六月、空海が博多津で乗船したことがまぢがなければ、これまで誰も考えたことのない空海の姿が浮かび上がってくる。その姿とは、嵐に遇つたあと、空海は九州までたどりつき、一年あまり大宰府近邊で船待ちをしていたことである。参考になるのが、最澄の事績。『叡山大師傳』によると、最澄は延暦二十二年閏十月二十三日、大宰府龍門山寺にて、四船の平達をいのつて檀像の薬師佛四體を造り、また法華・涅槃・華嚴・金光明等の大乘經を講説すること、おのおの數回におよんだという。この場合、最澄だけが個人的に九州に行つていたのか、それとも嵐に事なきをえた船の單位で九州まで行つていたのかは、詳らかでない。とはいへ、最澄が大宰府付近で船待ちをしていたことは信じられており、このことを基準にすると、空海も同様の行動をとつたとみなしてもおかしくない。九州における空海の傳承に、宇佐八幡神宮・香春（かわら）神社への參詣、龍門（かまど）神社での神變などが語られてきた。これらは從來、入唐歸朝後のこととみなされてきたけれども、今一度、入唐前を視野に入れて考えてみる必要があるらう。

ともあれ、「季夏の月」は空海その人のことばであり、延暦二十三年六月、空海は博多津にて大使にしたがって第一船にのりこんだのであった。このような考えが首肯されるならば、入唐前の二人は、挨拶程度のことばしか交わしていないかったとみなす従來の説は、再考されなければならないであろう。二人には、挨拶以上のことばを交わすだけの時間があった、とみなしておきたい。

三、交友のはじまり

名書呈上 二人の實質的な交友は、大同四年（八〇九）にはじまる。『天台霞標』には、大同四年（八〇九）二月三日、空海が最澄に差し出したという名書を収録する。その全文をあげてみよう。

奉上す 僧空海

大同四年二月三日

右、天台の傳燈の爲に、比叡の大禪師に向い奉り、謹んで名書を捧ぐ。敬つて白（もう）す。

名書とは名簿（みょうぶ）ともいい、「姓名をしるした書付で、平安時代、地方豪族が中央での官途を得るため、権門勢家に名簿を提出して主従關係にはいる證とした」といわれる。右

最澄と空海（武内）

の名書にも、「天台の傳燈の爲に、比叡の大禪師に向い奉り、謹んで名書を捧ぐ。」とあるので、最澄に對して弟子の禮をとられたとも考えられる。天台宗ではこのような名書呈上もありえたとみなすけれども、眞言宗では否定的なみかたが主流をしめる。

私も、二つの點から否定的にならざるをえない。第一は、史料の面から。『天台霞標』所收の名書は、『延暦寺護國緣起』を引用したもので、この『護國緣起』は十三世紀後半の成立であつて、史料的にこれ以上さかのほりえないことである。第二は、この當時の二人の立場を考えると、最澄こそが空海を、空海が持ちかえった多くの密教經典・儀軌を必要としていたことである。最澄は延暦二十五年（八〇六）正月、天台宗に年分度者二人を敕許されたが、その一人が密教を専攻する遮那業であつた。桓武天皇から密教僧の養成を許された矢先に、正統な密教を學修した空海が大量の密教典籍・マンダラなどを請來したのであつた。よつて、最澄は一日もはやく空海に逢いたかつた、空海が請來した經典類をみたかつた、書寫したかつた、と私は考へる。

最古の書狀 そのことを如實に物語るのが、大同四年（八〇九）

八月二十四日付けの最澄から空海にあてた現存最古の手紙である。「謹んで啓す。借請法門の事」と書きだすこの手紙は、十二部五十五卷の典籍名がつづき、「右の法門、傳法のための故に暫く山室に借らん。敢えて損失せず。謹んで經珍佛子に付して、以て啓す。」で終っており、まるでメモのような簡略なものであった。注目すべきは、手紙の日付・八月二十四日である。なぜなら、この日付は空海が京に入った直後と考えられるからである。空海に入京の許可がおりたのは、この年の七月十六日のことであった。その太政官符のあて先は「和泉國司」。これを信じるならば、このとき、空海は和泉國にいたことになる。場所については、檳尾山寺説・國分寺説などあるけれども、推測の域をでるものではない。

ともあれ、この許可の知らせをうけた空海が實際に京に入ったのは、早くとも八月のはじめであったであろう。空海の京での住まいは高雄山寺。身邊の整理が一段落したところを見計らって、最澄は空海にさきの手紙を届けたのであった。ところで、最澄の手紙は一見してわかるように、きわめて簡略なメモのような内容であった。いくらなんでも、初対面の人にこのような文面の手紙を出すはずはないので、二人のあいだには、これ以前に何らかの交渉があり、すでに挨拶はす

ませていたとみてよい。それがいつ、いかなる形であったかは、徴すべき史料がない。ここで想起されるのが、入唐するまえの大宰府における一年間である。あるいはその時点で、すでに心を許しあえるなかになっていたのではなかったか。

借覽の典籍

ここで注目すべきは、十二部五十五卷という大量の典籍を借覽していること、しかも、これらの典籍はすべて空海の『御請來目錄』に記載されていたものであった。特に『三藏表答碑』は、空海が『請來錄』に記す「教の優劣、法の濫觴は金剛薩埵五祕密儀軌及び大辯正三藏の表答等に廣く説くが如し」に誘發されたものであった。つまり、最澄はこの時点で、『御請來目錄』を見ていたのである。現に、最澄筆の『御請來目錄』が東寺に傳存することから、最澄が早々に書寫していたことはまちがいない、長安における空海の求法の全貌を知っていたのであった。それと、十二部のなか、①『大日經略攝念誦隨行法』などの『大日經』關連の四部、②『悉曇字記』など悉曇關連の三部、③四十卷『華嚴經』など華嚴關連の二部が目立つ。特に①は、この當時の最澄の關心が『大日經』系統の密教にあったことを物語るものである。いずれにしても、入唐歸朝後の二人の交友が大同四年

(八〇九)からはじまったことはまちがいない。この手紙を嚆矢として、最澄はこのあと、矢継ぎばやに經典の借覽と灌頂の受法を、空海にお願いされたのであった。

四、良好な日々 ― 第一期・二期 ―

交友の軌跡 大同四年からはじまった二人の交友は、その後いかなる軌跡をたどったのか。

最澄から空海にあててされた二十四通の手紙は、五期に大別できそうである。川崎庸之氏の論考にもとづいて編年順に分類すると、ほぼつぎのようになる(洋数字は『傳教大師全集』五所収『傳教大師消息』の通番號である)。

第一期、大同四年(八〇九) 八月から弘仁元年(八一〇)

三月……17・5・6・4・1・16・23・20

第二期、弘仁元年(八一〇) 十二月から同二年四月……

7・22・3・25・24

第三期、弘仁三年(八二二) 八月から同四年正月……

9・19・15・11・12・2・21・26

第四期、弘仁四年(八二三) 十一月……13

第五期、弘仁五年(八二四) 以降……18・14

以下、五期それぞれにおける交友の實際を整理してみよう。

最澄と空海(武内)

第一期 半年あまりに八通の手紙が残る。特筆すべきは、

二人とも佛典の借覽を願っていたことである。(大同四年)十一月二日付書狀(6)には、空海から『摩訶止觀』の借覽を要請された最澄は、みずから校勘し朱點を付しているので終り次第奉呈したいと記し、追而書には逆に『十一面儀軌』『千手儀軌』の借覽を願っている。最澄は(弘仁元年)正月十五日(16)、「謹奉借請 十一面儀軌 千手菩薩儀軌」と書きだして、この二つの借覽を正式にお願いするとともに、借覽の理由を「入唐する前に造った佛像は、まだ供養を終えていない。來る三月に供養したいので」といい、ついでに最澄に「其の儀軌の中の義を教授」してほしいと記している。二月二十七日(23)、最澄は『十一面儀軌』中卷の書寫をおえたことを記し、あわせて残りの上下二卷と『千手儀軌』を參上する妙澄にわたしてほしいと書き、三月五日(20)に『十一面儀軌』中卷を返却したのであった。

なお、空海が求めた『摩訶止觀』は、(弘仁元年)九月十一日付の「風信帖」に「兼ねて止觀の妙門を惠まれ、頂戴供養するに、厝(お)く攸(ところ)を知らず。」と記されており、最澄から届けられたことを知りうるのである。

第二期 半年餘りの空白ののち、第二期がはじまる。一番注目されるのは、最澄がしきりに逢いたい意志を表明していることである。(弘仁元年)十二月三日(7)には「後日の晩を取りて房下に參謁せん」といい、弘仁二年二月十四日(22)には、本日、都に向かう豫定があるので、ぜひこの機會に高雄山寺にまいり、遍照一尊の灌頂を受法し、七日ばかり眞言法門を學習させていただきたい、とお願ひされたが、實現しなかつた(二月十五日付書狀(3))。(弘仁二年)四月十三日付書狀(24)には、特筆すべきことが三つある。第一は、「宿因微薄にして、未だ密會に預からず」とあつて、このとき、まだ二人は對面の機會をもつていなかったことである。第二は、「去年期するところの悉地の月は來月に當たれり」とあつて、前年に、二人が祕密法門の傳授を約束していたことである。この約束がいかなるものであつたかは、殘念ながらわからない。この約束も果されなかつたようである。第三は、この日「天台文句并湛然文句記二部」は證本として、「貞元目錄」は一切經を寫すときの資料として借覽を要請し、翌十四日に「天台文句二部十七卷、湛然文句記十卷、貞元目錄上帙十卷」の合計三十七卷が貸與されたことである。

なお、傳授が約束された「昨年」とは弘仁元年とみなされ

ている。二人が手に手を取らんばかりに意氣投合し、極めて友好的な様子がよみとれるのが、「風信雲書、天より翔臨す」と書きたす「風信帖」である。特に、最澄から惠贈された『摩訶止觀』に感謝・雀躍するとともに、叡山への登山を勧められたが、いまは修法に専念して叶わないことを詫び、逆に、最澄と室生の修圓と三人で一處に會して、「佛法の大事因縁を商量し、共に法幢を建てて、佛の恩徳に報い」たいので、ぜひ、この院までお越し頂きたいと、最澄の來駕を促している。このように意氣投合していたときの一齣として、傳授の約束が取り交わされたものと想われる。

五、高雄の灌頂と心の乖離 —第三期—

傳法の承諾 第二期から一年四ヶ月あまり、空海にあって最澄の手紙はみあたらない。この間の最澄は、病による遺書の作成、泰範の離山など多難であつた。しかし、ここに至り、最澄が懇願していた空海からの灌頂受法がやっと叶い、二人にとって、心がかつとも高揚した時期であつた反面、受法のあり方をめぐつて氣まずい想いが漂いはじめる時期でもあつた。

まず、特筆すべきは、祕密法門の傳法承諾に深謝するとと

もに、天台宗の年分度者の一部門・遮那業の僧を養成することに助力を要請した弘仁三年八月十九日の書状(9)である。祕密法門の傳法承諾は、「辱も金札を枉げられ、傳法の旨を告ぐ。歡ばしいかな、先期を忘れず」とたったの一行だけで、いつ、どこで、何を授けるのかなど、その具體的なことは何もわからない。あとの大部分は、もっぱら天台宗の年分度者についてである。傳法の約諾がよほど嬉しかったのか、日ごろの考え、つまり空海からの受法は年分度者のひとり遮那業の僧を養成するためであることを素直に書いている。なかでも注目すべきは、「法華一乗と眞言一乗とに差異はない同じだ」とみずからの密教觀を告白しているところである。この密教觀は終生かわらなかつた。なお、この約諾が實現したか否かはわからない。あるいは、十一月からの高雄での灌頂に繋がるのかも知れないが、祕密法門の傳法は面授でなければならぬ、とする空海の立場からは、手紙で全てをすまされなかつたことはいふまでもない。

乙訓の約諾 弘仁三年十月二十七日、最澄は興福寺維摩會からの歸途、弟子の光定をともなつて乙訓寺に空海を訪ね、談合一泊するとともに、高雄山寺における灌頂傳授の確約を

最澄と空海(武内)

とりつけ、同年十一月十五日、十二月十四日それぞれ金剛界・胎藏の結縁灌頂を授けられた。弘仁三年(八一二)十一月五日付の泰範あての書簡には、最澄が乙訓寺を訪ねたときの詳細とともに、空海の健康状態などが記されており、きわめて興味深い。特に留意すべきは、①最澄がずっと懇願していた灌頂受法が、やっと現實のものとなつたこと。②灌頂傳授の日時が、十二月十日・高雄山寺と決まつたこと。③空海が「空海生年四十、期命盡くべし。」と體調の不調をつけ、今年中に授法したいと語つたこと。④この手紙そのものは、最澄のもとから近江國高島郡に隱棲していた泰範に、ともに灌頂を受法するよう勧誘したものであつたこと、の四つである。

泰範略歴 ここで、この手紙を受取つた泰範について、一言しておきたい。もと元興寺の僧であつた泰範は、唐から歸朝後の最澄に師事して叡山で天台法門の學修にはげみ、弘仁三年(八一二)五月、最澄の後繼者として、比叡山寺の總別當兼文書司に任命されるまでに最澄から信頼されていたが、同年六月には叡山の衆徒との軋轢のために、近江國高島郡に隱棲した。そうしてこの年十二月、最澄の勧めによって高雄山寺にのぼり、空海から胎藏・金剛界の灌頂を受法し、その

後は最澄からの再三にわたる歸山の懇請を拒絶し、空海のもとにとどまつて眞言の修學につとめた。その結果、弘仁七年（八一六）七月、高野山が空海に下賜されると、ただちに實惠とともに高野山に派遣され、同十二年（八二二）十一月藤原冬嗣らにあてた空海の書状には、「一・三の弟子を率いて日夜教授したところ、杲隣・實惠・泰範・智泉の四名は、金剛界・大悲胎藏の兩部大法の奥旨を體得した（趣意）」とあつて、眞言宗のなかでも重要な位置をしめていた。最澄と空海の二人から信頼をよせられていたことから、きわめて勝れた資質の持ち主であつたと考えられるが、その没年・年令ともに信ずべき史料はない。

付言すると、従來、最澄の愛弟子泰範をあたかも空海が奪い取つたかのように云われてきたけれども、そうではない。弘仁三年十二月、空海から灌頂を受法した時點で、泰範の心は叡山を離れており、最澄のもとに歸る意志は毛頭なかつたのである。にもかかわらず、再三にわたり歸山をもとめた最澄の行動は、執着であつて、自己満足以外のなにものでもなかつたといえよう。

高雄の灌頂 最澄は、弘仁三年（八一二）十一月十四日、

灌頂の準備のために高雄山寺にのぼつた。すると空海から「明日入壇受法するように」と告げられ、翌十五日急遽、金剛界の灌頂壇がひらかれた。空海眞筆の『灌頂曆名』によると、このとき受法したのは、最澄・播磨大掾和氣眞綱・大學大允和氣仲世・美濃種人の四名であつた。乙訓寺で取り決めた受法の日は十二月十日。ではなぜ、約一ヶ月もはやいこの日に、灌頂はおこなわれたのであろうか。急を要した、しかるべき理由があつたはずである。それは、「空海生年四十、期命盡くべし」と語つた空海の健康状態にあつたと考えてよい。そうすると、このとき空海の體調は重篤であつたことが推測されるのである。

同年十二月十四日、大悲胎藏の灌頂壇が開かれた。『灌頂曆名』には百九十四名の入壇者を記す。その内譯は、太僧二十二人、沙彌四十一人、近事四十人、童子七十一人、音聲人二十人であつた。このなかには、太僧に最澄・泰範・圓澄らがあり、近事衆には唐から歸國するとき乗つた船の船頭・高階遠成の姿もあつた。

心の騷り ところで、最澄が待ち望み、喜びいさんで受法した二度の灌頂は、最澄が當初考えていたものとはちがつて

いた。最澄の考えは、正式に法を傳えたことを證明する傳法灌頂。しかるに、實際は佛と縁をむすぶための結縁灌頂であった。傳法灌頂は僧のみ、しかも師が特別にみとめたものだけが受法できた。一方の結縁灌頂は、僧俗の別なくだれでも入壇することができた。さきに受法した百九十四名の内譯を記したが、近事は在家の佛教信者、童子は僧のもとで使い走りなどをしてきた得度前の子供であった。これらは明らかに俗人であり、最澄が受法した灌頂が結縁灌頂であったことは明らかである。この傳法・結縁灌頂のちがいが發端となり、二人のあいだには、やがて埋めることのできない大きな溝ができていった、と私は考える。つぎに、その二人の心の葛藤を追ってみたい。

「空海の叱責 最澄は、弘仁四年（八一三）正月十八日付の手紙を七通残している。五通は空海に、二通は高雄山寺三綱にあてたものである。「世間の願」と書きだす空海あての手紙（26）に注目したい。まず、全文をあげてみよう。

世間の願と、また出世上々の願とは、最澄住持の念い、寢食も忘れず。惟うに形迹（けいせき）せざれ。

④但、最澄の意趣は御書等を寫すべきのみ。目錄に依つ

最澄と空海（武内）

て皆悉く寫し取り了んぬれば、即ち持して彼の院に向かい、一度に聽學せん。⑤此の院にして寫し取ること穩便有り。彼の院に食を上すこと太（はなは）だ難く、寫し取るに由無し。

⑥伏して乞う、吾が大師、奸心（かんじん）を用い、盜みて御書を寫し取り、慢心を發すと疑うこと莫かれ。泰範佛子に隨つて意を申ぶ。⑦寫すところの本、好便借與せられよ。

小弟子、越三味の心を發さず。⑧委曲の志、具に泰範佛子に知らしむ。更に導（い）わず。以て指南の志を表す。

天照、天照。稽首。

正月十八日 弟子最澄⑨正言を唱⑩ぶ（傍線筆者）

この手紙をよんで、奇異に感じるのは私だけであろうか。全體的に、辯解・言い譯をつづつたものとの感じを強くうける。特に傍線部⑨には、尋常でないものを感じる。「奸心」盗みて「慢心」「疑うことなかれ」といったことばが、まともに使われているところにドロドロしたもの、異常さを感じるのである。

先學はこの手紙をどのようにみておられるか、二・三紹介してみたい。高木神元先生は『空海と最澄の手紙』で、この

書簡は「空海にあてて、經論書寫の便宜を與えてくれるよう依頼したもの」といい、「最澄の意趣は御書等を寫すべきのみ」という筆受を主とする習學態度が、やがて兩大師袂別の「一因ともなる」と、ここで提起された問題がやがておとずれの訣別の一因となった、とみなされた。だが、すでにこの時点で、二人のあいだには筆受・面授の問題が表面化していた、と私は考える。

一方、佐伯有清先生は『最澄と空海 交友の軌跡』で、

「但、最澄の意趣は御書等を寫すべきのみ。目錄に依つて皆悉く寫し取り了んぬれば、即ち持して彼の院に向かい、一度聽學せん」というのが、最澄の本心であつた。

とにかく最澄は、空海が唐から將來した經論を、「目錄」、すなわち先年、最澄が寫した空海の『請來目錄』によつて、すべて書寫することを目指したのであつた。

といわれる。手紙の内容ということであれば、これでよいかもしれないが、私はこの手紙の裏に、二人のこころの葛藤があつた、と考える。つまり、なぜ最澄はこのような手紙を書かなければならなかつたのか、を問題としたいのである。

私見を記すならば、この手紙が書かれる前段階として、最澄の密教受法の態度、特に筆授について、空海から叱責のこ

とばが發せられ、それに對する釋明をつづつたのが、とりもなおさず、この手紙であつたと、私は考える。空海の叱責がどのようなものであつたかは、最澄の「但、最澄の意趣は御書等を寫すべきのみ。」「伏して乞う、吾が大師、好心を用い、盗みて御書を寫し取り、慢心を發すと疑ふことなかれ。」「小弟子、越三味の心を發さず。」といったことばに、端的に表われているといえよう。

叱責の實態 ここで想起されるのが、『高野雜筆集』所收の日付もあて名もない、つぎの書狀である。それは、「曼茶の深法、諸佛の祕印」の受法を求めてきた僧に對して、密教における受法・傳授のあるべき形を教示したものである。

信滿至るによつて問を辱くし、兼ねて紙筆を惠まれ、珍荷言うべからず。餘寒未だ退かず。惟みるに法體如何。貧道、易量なり。居は則ち東西なれども、志は常に松柏たり。㊦要(もと)むるところの經法は傳授の道にして、

往年陳べ申し訖んぬ。然れども重ねて紀綱を説かん。

夫れ曼茶の深法、諸佛の祕印は談説に時あり。流傳機に逗う。大師、傳授の法を説きたまへり。末葉傳うる者、
㊧敢えて三昧耶に違越せざれと。㊨與奪は我が志に非ず。

得否は公の情に繋がれり。手を握りて契約し、口に傳えて心に授くることを期すのみ。惟うにこれを悉くせよ。還るによる。不具。(傍線筆者)

右の本文を、六段落にわけて要約してみよう。

① 住居は東西にわかれてはいるけれども、相思う心は松柏のように常に變わらない。

② あなたが要めるところの經法は、傳授の道に則ったものでなければならぬことは、先年申しあげたとおりであるが、重ねて大綱を説き示そう。

③ 曼荼羅に入るための深祕の法・諸佛の祕印を傳授するには、時期と受者の機根が重要視される。

④ 如來大師は、傳授のあるべき形をきちつと説かれた。いつの時代になつても、規則を破つてはいけない。

⑤ 法を授ける・授けないは私の意志ではなく、受ける受けないはもっぱらあなたの心次第で決まる。

⑥ もし、受法を望むのであれば、手と手を握りあい、口から口へと傳え、心に授けることを期するだけである。このことを充分に賢察されたい。

特筆すべきは、傍線⑤で「敢えて三昧耶に遠越せざれ」と越三昧耶の行爲を誡めていることである。また、⑤の「與奪

最澄と空海(武内)

は我が志に非ず。得否は公の情に繋がれり。手を握りて契約し、口に傳えて心に授くることを期すのみ。」は、あとに紹介する「答書」の語り口ときわめて近いことが指摘でき、密教の授受は一にも二にも二にも受者の心構えにあることが強調されていることである。

問題は、この書簡がいつ、誰に出されたかである。高木先生は、弘仁五年以降のものとし、あて先は弘仁四年二月、空海のもとで「法華儀軌」の一尊法を受けた叡山のある僧であろうといわれる。また、佐伯先生は、「居は則ち東西なれども」の東西が比叡山寺と高雄山寺をさすこと、「惟みるに法體如何」「得否は公の情に繋がれり」と相手に敬意が拂われていることから、最澄あてとみなされるが、書かれた時期は明記されない。飯島太千雄氏は、最澄あてとし、さきの「世間の願」ではじまる正月十八日付の最澄書狀に對する返信とみなされる。

私は、正月十八日付の最澄書狀が書かれる直前に、最澄にあてて出されたものとみなしておきたい。まず、「餘寒未だ退かず」とあり、正月に書かれたことはまちがいない。密教受法のあり方が力説されていること、しかも叡山に出されていることを勘案するならば、最澄こそが相應しい送り先とい

えよう。ただ氣がかりな點は、傍線⑥に「要むるところの經法は傳授の道にして、往年陳べ申し訖んぬ」とあつて、このことは先年申しあげたと記すところである。しかしこれも、さしたる問題とはならないであらう。

一回目の叱責 なぜなら、(大同四年(八〇九)十一月二日付最澄書狀(6)と(弘仁元年)正月十五日付最澄書狀(16)から、二人の交友がはじまった直後のこの時期に、十一面儀軌と千手儀軌の傳授を斷つた經緯があり、このとき密教受法のあるべき形が教示されていたことはまちがいないからである。すなわち、最澄は、十一月二日付書狀の追而書で、唐突に弟子の妙澄に十一面法と千手法の傳授をお願いされ、「此れ甚要なり。機縁を隔てざれ」と記す。正月十五日付の書狀では、入唐に際して佛像を造立したが供養はまだである。來る三月に供養を行いたので『十一面儀軌』『千手菩薩儀軌』の借用と妙澄への傳授をお願いしたいといい、「豈に空傳ならんや。最澄、すべて躁慢の志なし。聖化、豈に機縁を隔てんや」と結んでいる。「豈に空傳ならんや」「躁慢の志なし」からは、この裏に、空海から密教受法について何らかの忠告があつたとみなすことは許さるであらう。

六、圓澄等書狀と高雄灌頂の實際

圓澄書狀 最澄と空海とのあいだで、お互いを「私が考えていた人物とどうも違うぞ」といったたわだかまり・不信任感を抱くようになったのは、高雄山寺における二度目の灌頂の直後ではなかつたか、と想われる。このことを考える上で、きわめて有用な史料がある。それは、天長八年(八三一)九月二十五日付けの「天台最澄和尚の弟子等、阿闍梨に奉る書」(以下、「圓澄ら書狀」と稱す)である。この書狀は、正統な密教を何としても修學しておかなければならない、と考えた最澄の弟子圓澄ら三十名が連署して、密教の傳授を空海に懇請したときの手紙である。特筆すべきは、このなかに、①弘仁三年(八一三)冬の二度にわたる灌頂のことと、②灌頂直後の最澄と空海が、大法の授受について交わした對話が記録されていることである。

灌頂の實際 まず、二度にわたる灌頂であるが、この書狀にだけ見られることが三つある。第一は、最澄は受法するまえに「最澄、大唐に渡るといえども、眞言を學ばず。今、高雄寺空海阿闍梨に於て眞言の祕法を受けん」と上表してい

たこと。第二は、空海にも「最澄、大唐に渡るといへども、未だ眞言の法を學ばず。今望むらくは、大毘盧遮那胎藏および金剛頂の法を受學せん」と書を呈していたこと。第三は、十二月十五日、百餘の弟子とともに受法した灌頂を受明灌頂といい、十八道の眞言も學んだが、梵字眞言の受學は少々難しかった、と記されていることである。灌頂の日を十二月十五日、受者を百餘と記すところが、空海の記録とちがっている。今日、受明灌頂とは密教を正式に學修するにさきだち許可を與えるための灌頂をいう。また、「十八道の眞言」を學んだといふけれども、灌頂のとき同時に受法したかどうかは明らかでない。

二人の對話 つぎは、灌頂の直後になされた最澄と空海の對話である。極めて興味深い内容なので、全文をあげよう。

㉞ 即ち和尚に問うて云わく、大法儀軌を受けんこと幾月にか得せしめんや、と。㉟ 答えて云わく、三年にして、功を畢えん、と。㊱ 歎じて曰わく、本、一夏を期す。若し數年を経べくんば、暫く本居に歸り、且つ本宗の事を遂げて、後日來たりて學ばんには若かず、と。㊲ 即ち、四年正月を以て眞言を受學せしめんがために、圓澄、泰

最澄と空海（武内）

範、賢榮等を以て大阿闍梨に屬し奉り了んぬ。㊳ 然りと
いへども、比年（このころ）限るに煩碎を以てして、未
だ本意を遂げず。朝夕に顧み思いて、寢食も安からず。
内容を整理すると、つぎのようになろう。

㉞ 最澄が問われた。「大法儀軌を受けるには、何ヶ月ほどかかりましょうか」と。

㉟ 空海は答えた。「三年勉強してください」と。

㊱ 最澄はため息をつき、「せいせい一夏（三ヶ月）もあれば、と考えていました。數年も必要ならば、しばらく叡山に歸り、天台宗のことをやり遂げたあと、高雄にきて眞言法門を學修しましょう」と、なげかれた。

㊲ そして最澄は、弘仁四年（八一三）正月、眞言法門を受學させるために、身代わりとして圓澄・泰範・賢榮らを空海のもとに派遣した。

㊳ しかしながら、そのあとずっと煩わしきことが多くて、いまだ本來の目的を達成していない。そのことを考えると、寢食もままならない。

心のズレ この一連のやりとりを見ると、空海でなくとも、あまりにも身勝手すぎて、いい加減にしてくれ、とい

いたくなるであろう。「灌頂を授けてほしい」といわれるから灌頂壇を開くと、「それではなくて、傳法灌頂を」という。「それなら三年間勉強して下さい」というと、「いまは都合が悪いので」といって叡山に歸つてしまい、「私の身代わりに弟子を派遣しますから宜しく」といって、何人もの弟子を送り込んでくる。

この身勝手すぎる最澄にたいして、空海は一度きちつとしておかなければと考え、密教受法のあるべきすがた・形、受者の態度・學び方などを、最澄に直接示されたのではなかったか、と考える。それが、さきに紹介した「信滿至る」ではじまる書狀であり、この書狀に對する返事が正月十八日付の最澄の手紙であった。そんなわけで、「どうもちがうぞ」といった想いを、空海は持たれたにちがいない。

一方、最澄も別の意味で、「どうもちがうぞ」といった想いをいだいたのではなかったか。てっきり傳法灌頂だと思っていたのに、蓋をあけてみると結縁灌頂であった。みずからの経歴と地位を考えると、當然、傳法灌頂と思つていた、いや傳法灌頂こそふさわしい、と考えていたであろう。それが結縁灌頂であった。あなたは乙訓寺で、「宜しく持するところの眞言の法、最澄闍梨に付屬すべし。惟うに、早速に今

年の内に付法を受取せよ。」といわれたではないか。また、十一月には急遽「明日灌頂を」とあれほど急がれたのに、一ヶ月後には「三年勉強を」とは、一體どうなっているのか、との想いもあったであろう。であれば、三ヶ月みておけば傳法灌頂を、と考えたが、三年といわれてガツクリするとともに、なぜ私がそこまで、との想いを強くしたにちがいない。空海としては、密教の師として、あたりまえのことを云つただけであつたけれども、最澄には通じなかつた。というより、最澄のプライドが許さなかつたのであろう。

なお、このときの重篤な病は、一ヶ月後に態度を豹變させることから、肉體的なそれではなく、精神的なものであつたとみなされている。

ともあれ、二人の意識に微妙なズレが生じてくるのは、弘仁三年十二月十四日の胎藏灌頂の直後であつたとみなして誤りないであろう。

借覽の典籍 最後に、二人の訣別を決定づけたといえる『理趣釋經』の借請拒絶の問題を考えるうえで無視できないのが、第三期に最澄が借請をおねがひした典籍類である。實は、この時期に借請を願つたのは二回、弘仁三年十月二十六日、つ

まり乙訓寺に空海を訪ねる前日に不空譯の三卷本『金剛頂經』を、そして二回目の灌頂が終った直後の同年十二月十八日、守護國界主經一帖、金剛薩埵五祕密念誦儀軌一卷など十二帖をお願いされた。この十二帖とは、『三十帖策子』のなかの十二帖をさす。最澄の手紙には十一の典籍名しか確認できないが、『三十帖策子』の十二帖分とすれば、典籍数はゆうに二十部を越すであろう。親密度が最高潮に達していたと思われる、二度目の灌頂直後というこの時期がそうさせたのであろうか。それはさておき、空海が最澄の借請に應じたのは、このときが最後となった。注目すべきは、『大日經』系統だけであった最澄の關心が、『金剛頂經』系統の密教にまで廣がりつつあったことである。

七、『理趣釋經』問題と訣別の時期 — 第四期 —

問題の概要 二人が訣別した根本要因の一つが『理趣釋經』の借請をめぐる問題にあったことはまちがいない、と私は考える。その端緒となったのが、第四期、一通だけみられる弘仁四年十一月二十三日付の最澄書狀(13)である。ここで、『理趣釋經』の借請をめぐる問題の概略を記してみよう。

①空海がみずからの四十歳を記念して作成した「中壽感

最澄と空海(武内)

興詩」を贈られた最澄は、弘仁四年(八一三)十一月二十三日付の書狀で、空海に『文殊讚法身禮』『方圓圖』『注義』とともに、『釋理趣經一卷』の借覽を請われた。これに對して、

②空海は「叡山の澄法師、『理趣釋經』を求むるに答する書」(以下、「答書」と略稱す)を書き、密教受法のあるべき形を苛烈なことばでもって垂示するとともに、『理趣釋經』の借與を斷られたのであった。問題をややこしくしているのが、

③弘仁四年十一月二十五日付で泰範にあてた最澄直筆の書狀「久隔帖」が傳存するからである。そこには、『一百廿禮佛』『方圓圖』『注義』の名は記されているけれども、『釋理趣經一卷』は見當たらない。しかも、手紙の趣旨は、空海から贈られた「中壽感興詩」に對する和韻の詩を作りたいので、『一百廿禮佛』『方圓圖』『注義』の内容を空海に聞いて教えてほしい、というものであった。さらに、

④最澄の和韻の詩にたいする十二月十六日付の空海禮狀が、昭和三十八年(一九六三)、あらたに發見されたからである。

このように、「中壽感興詩」を贈られた最澄が和韻の詩を作成し、それに答えて空海が禮狀を出していることから、兩者のあいだは決して險惡ではなかったとみなされ、近年では(一)「答書」のあて先を最澄ではなく圓澄とみなし、しかも「答書」が書かれたのは弘仁五年以降とみなす説、(二)「答書」は圓澄に宛てて出されたものであるから、弘仁四年十一月二十三日付の最澄書狀と「答書」とはまったく無關係であり、かつ「釋理趣經一卷」は後世の竄入であるとみなす説、などが新たに提示され、混沌とした様相を呈してきている。

私見 はたして、二人が袂を別つにいたる過程で、『理趣釋經』の貸借問題は介在しなかったのであろうか。

結論的なことをいうと、私は介在していたとみなし、二人の訣別の時期をつぎのように考える。二人の交友に翳りがみえはじめるのは、一般的に、その絶頂期ともみなされる弘仁三年十一月・同十二月の高雄山寺における灌頂の直後であり、その後、兩者のあいだには埋めることのできない溝が徐々に広がっていった。そうして、弘仁四年十一月二十三日付の最澄書狀とそれに對する空海の「答書」を契機として、その溝は修正不可能な状態にいたった。したがって、弘仁四年末の時点で、かつて新佛敎の寶塔をともに建てようと誓った緊密

なる精神的繋がりは完全に絶たれていたのではなかったか、特に「答書」が決定的な位置をしめたであろう、と。

先行研究 ここで、さきに概略であげた四つの手紙類に限定して、先行研究を整理してみよう。

最大の争點は、空海の「答書」を弘仁四年十一月二十三日付の最澄書狀の返信とみなすか否かであり、この解釋をめぐって、先行研究は大きく二つに分かれる。すなわち、(一)返信とみなす説と(二)返信とみなさない説である。このうち、(一)返信とみなす説は、「答書」のあて先を最澄とする説で一致し、しかも「答書」が書かれた時期も、弘仁四年十一月ではほぼ一致している。これに對して、(二)返信とみなさない説では、「答書」のあて先、および「答書」が書かれた時期をめぐって、いくつかの説に分かれる。すなわち、「答書」のあて先は、①最澄とみなす説、②圓澄とみなす説の二つ。「答書」が書かれた時期は、③弘仁六年末から同七年の初め、④弘仁六・七年ころ、⑤弘仁六年以降、⑥弘仁七年の五月一日以前、の四つに分かれる。さらに、「答書」を返信とみなさない説をとる論考には、最澄が空海に借請した典籍リストにみられる「釋理趣經一卷」を、後世の竄入とみなす方が少

なくない。

苛烈な言葉 「答書」に關しては、あまりにも激烈なことばが見られることから、年長者である最澄ではなく、最澄の弟子である圓澄にあてたとみなし、書かれたのも弘仁四年十一月ではなく同五年以降である、とみなす説が有力視されつつあった。しかし、「答書」の苛烈な言辭は密教の師の立場から弟子にたいしての教誡であつて、圓澄あて説とか弘仁五年以降説は成りたたない、と考える。

まず、苛烈なことばといわれる一節をあげてみよう。それは第三段落であり、「又余未だ知らず。公は是聖化なりや、爲當（はた）凡夫なりや。」と、あなたは佛なのか、それとも凡夫なのかと詰問するところからはじまる、この書狀の中心をなす段である。ついで、もし佛であるならば、これ以上何を求めようとするのかと問ひ、もし凡夫として理趣を求めるのであれば、佛の教訓に従うべきこと、越三昧耶について、若し佛の教えに隨はば、則ち必ず須く三昧耶を慎むべし。三昧耶を越すれば、則ち傳者受者俱に益無けん。夫れ祕藏の興廢は唯汝と我となり。汝若し非法にして受け、我若し非法にして傳へば、則ち將來求法の人、何に由つて

最澄と空海（武内）

か求道の意を知ることを得ん。非法の傳受、是を盜法と名づく。即ち是れ佛を誑くなり。

と、苛烈なことばをもつて説かれた。ついで、密教の根底をなす傳授のあり方を

又祕藏の奥旨は文を得ることを貴しとせず。唯心を以て心に傳ふるに在り。文は是れ糟粕、文は是れ瓦礫なり。糟粕瓦礫を受くれば則ち粹實至實を失う。眞を棄てて偽を拾うは愚人の法なり。愚人の法には汝隨う可からず、亦求む可からず。

と説きしめされた。ここにいう越三昧耶と面授、いわゆる「唯心を以て心に傳ふる」は、さきに紹介した「信滿至る」ではじまる空海書狀で、すでに教示されていたことであつた。

圓澄説

ここで、圓澄あてではありえない根據を示そう。

それは、「答書」の第一段落である。まず「書信至つて深く下情を慰す。雪寒し。伏して惟みれば、止觀の座主法友常に勝れたりと。貧道易量なり。」と時候の挨拶からはじまり、ついで「貧道と闍梨と契れること積んで年歲有り。常に思はく、膠漆の芳、松柏と與に凋まず、乳水の馥、芝蘭と將に彌香しからん。」と緊密なる二人の交友にふれ、そして「多寶

の座を分ち、釋尊の法を弘めんと。此の心、此の契、誰か忘れ誰か忍ばん。然りと雖も顯教一乘は公に非ざれば傳えず、祕密佛藏は唯我が誓ふ所なり。彼此法を守つて談話に違あらず。不謂の志、何れの日にか忘れん。」と、ともに佛法の宣布を約束した仲であることを記す。特に「止觀の座主法友常に勝れたり」「貧道と鬮梨と契れること積んで年歲有り」「多寶の座を分ち、釋尊の法を弘めん」「顯教一乘は公に非ざれば傳えず、祕密佛藏は唯我が誓ふ所なり」などは、語りかけている相手が最澄であつてはじめて納得できることばである。しかもここには、險惡な感じは微塵も窺がえないのである。なお、空海が圓澄とであつたのは一年まえ、十二月十四日の胎藏灌頂のときが最初であつた。

五年以降説 つぎに、弘仁五年以降説がなりたない根據を示そう。「答書」には、「書信至つて」「忽ちに封緘を開いて」「還(かえり)に因つて此に一二を示す」などの語句がみられ、届いた書狀にたいする返書であつたことはまちがいない。また、「忽ちに封緘を開いて、具に理趣釋を覓むることを覺りぬ」から、「理趣釋」の借覽を求められたこともまちがいない。しかるに、弘仁五年以降とみなしたとき、この「答書」の内

容に對應する最澄の書狀は見あたらない。五年以降で今日まで残る手紙は二通、それも空海の督促に應えて借覽していた典籍を返還したときのメモのようなものだけである。したがつて、この時期、二人はたやすく典籍の借覽や教えを請うといった閒柄ではもはやなかつたのである。

今一つ、誰も氣づいていないのが「答書」冒頭に書かれた「信滿至つて深く下情を慰む。雪寒し。」の季語「雪寒し」である。空海の書狀で「雪寒し」とするものが三通あり、そのうち二通に日付がある。一通は最澄から贈られた和韻の詩に對する十二月十六日付の禮狀、あと一通は弘仁九年(八一八)十二月、高野山から某人にあてて出された書狀である。これより、「雪寒し」は冬の季語であり、「答書」が弘仁四年十一月末に書かれたことは動かないであらう。

後世竄入説 「釋理趣經一卷」を後世の竄入とみなす説がなりたないことは、別に述べたので詳述しないが、一言だけ申しておきたい。竄入説を最初にだされた高木神元先生は、空海あて書狀と泰範あて書狀「久隔帖」は、ともに十一月二十五日付であり、貞聰が高雄山寺に届けた。しかも、二通は同じ趣旨の書狀とみなされた。はたしてそうであらうか。

二通には大きなちがいが認められる。空海あてには典籍を借覽したいといい、泰範あてには空海に内容を聞いて教えてほしいという。また、空海あてには借覽したい理由は何も記されず、泰範あてに「和韻の詩を作りたいので」とあった。もし、二通とも同日のものとするれば、なぜちがう内容なのか、が問われなければならぬであろう。二通のあいだに二日の隔たりがあったとみなせば、このちがいが説明できよう。高木先生は「和韻の詩を作らんとする友情溢れるものであり、峻烈な拒絶の返書は相應しくない」といわれるが、二十三日付の書状だけを受けとった時點で、空海がはたして好意溢れる書状とみなすことができたであろうか。私は否といたい。何よりも、氣がかりな點は、最澄が追而書で「弟子の志、諸佛の知る所なり。都べて異心無し。惟みるに、棄捨すること莫くんば、弟子幸甚なり。」と記すことである。この「棄捨することなくくんば」を、高木先生は「この願いをお聞きとだけただければ」と譯される。私は文字どおり「見捨てないでいただきたい」と解しておきたい。それは、まあ半分に、さきに問題とした正月十八日付の手紙と一脈通じるものを感じるからである。やはり、「私にはふたごころなどありません。何とぞ見捨てないでいただきたい」は、尋常なことばとはい

最澄と空海（武内）

えないのである。

救いの手 いま一つ、重要なことが見落とされている。それは、「答書」の苛烈なことばだけが注目され、きつぱりと拒絶したとみなされているが、そうではない。空海は、ちゃんと救いの手をさしのべておられたのである。すなわち、「答書」第四段で、學ぶものは多いけれども、實際に身をもつて修さなければ益なきこと、實修實行すれば、誰でもただちに密教の修行者となることができ、實修實行こそが佛道體得の近道であると説かれる。ついで、第五段では、祕密の法門は未入壇の者に、みだりに傳授することが禁じられているけれども、佛戒を守り、教えのごとく實修するならば、大日如來の五智の密印をも受けることができ、ましてや『理趣釋經』の貸與も、また祕旨の傳授も叶えられることを、

子（なんじ）、若し三昧耶を越せずして、護ること身命の如くし、堅く四禁を持つて愛すること眼目に均しくし、教の如く修觀し、坎（かん）に臨んで續有らば、則ち五智の祕璽、踵を旋らすに期しつ可し。況んや乃ち髻中の明珠、誰か亦祕し惜しまん。

と記す。つまり、傳法灌頂の受法も『理趣釋經』の貸與も、

あなたの心がけ次第であると云つていたのであった。

「答書」全體を通覽していえることは、弟子に對するきわめて濃やかな慈愛にみちた教導であるといつてもよいことである。

おわりに

紙數を大幅に超えてしまった。最後に、二人の密教觀と密教受法にたいする見解の相違をみておきたい。

二人の密教觀 最澄の密教觀は、天台法門と眞言法門とのあいだに優劣をみとめない圓密一致の立場であり、密教受法の方法は筆授、師につかないで經典を書寫し讀解するだけ、つまり獨學でも可能である、とされた。圓密一致の立場は、弘仁三年（八一三）八月十九日付の空海あて書狀で「一乗の旨、眞言と異なることなし。」といい、同七年（八一六）五月一日付の泰範あて書狀に「蓋し劣を捨てて勝を取るは世上の常理なり。然るに法花一乗と眞言一乗と、何ぞ優劣有らんや。」と記すところに。一方、密教受法の方法については、「答書」をはじめ、空海から再三にわたつて非法の傳授「越三昧耶」の忠告が發せられていること、並びに弘仁七年に書かれた「依

憑天台集」序で、最澄が「眞言家は筆授の傳授を混す」と書いているところに、端的にあらわれている。

これに對して、空海は佛法に顯密二教の別ありとされ、眞言ひとり密教とし、天台法門は四家大乘の一つであり顯教に屬するとみなされた。また、密教受法の方法については、面授の立場をつよく主張された。「信滿至つて」の書狀に「手を握りて契約し、口に傳えて心に授くることを期すのみ。」といい、「答書」でも「祕藏の奥旨は文を得ることを貴しとせず。唯心を以つて心に傳ふるに在り。」と面授を強く主張され、非法の傳授を語氣をつよめて誡められたのであった。

弘仁四年（八一三）十二月、最澄は空海の「中壽感興詩」にたいする和韻の詩を贈つておられる。うがった見方かもしれないが、これは、態度を硬化させつたあつた空海が、心を改めてくれることに一縷の望みをたくした、最澄の大芝居ではなかつたかとも考える。なぜなら、空海に和韻の詩を贈っていることは、一見ふたりの交友がうまく運んでいるかに見えるけれども、最澄は同年十一月二十三日付の書狀の追而書で、「弟子の志、諸佛の知るところ、都て異心なし。惟うに棄捨することなくんば、弟子幸甚。」とかき、「見捨てないで

「ただきたい」といつているところに、さきに問題とした正月十八日付の手紙と一脈通じるものを感じるからである。

第五期にあたる弘仁五年以降は、空海の督促にもとづき借覽していた典籍を返却したときのメモのような書状が二通のこるだけである。したがって、この時期に、最澄が空海に密教にたいする疑義を質したり教示をお願いしたりできる状況ではありえなかつたであろう。さきにあげた『依憑天台集』序の「眞言家は筆授の傳授を混す」からも、この推測が裏付けられよう。

最澄と空海、二人の交友は、その絶頂期ともみなされる弘仁三年末の高雄の灌頂直後から同四年はじめにかけて、微妙な意識のズレが生じ、おそらく一年もたないうちに、修正不可能なまでの大きな溝となつていったのはなかつたか。その破局をむかえる最大の契機となつたのが、外でもない、弘仁四年十一月に書かれた空海の「答書」であつた、と考える。このように、一見、悲惨な結末にむかうわけであるけれども、この訣別をバネとして、弘仁五年以降、二人はそれぞれ独自の道―最澄は天台法門を、空海は眞言法門をわが國に弘め定着させる運動―を歩みはじめるのであつた。

最澄と空海（武内）

【参考文献】

- 1、三浦周行『傳教大師傳』一九二二年三月、平安考古會。
- 2、加藤精神「傳教弘法兩大師の理趣釋經問題について」『ビタカ』第三年第一號、一九三五年一月。
- 3、財津永次「風信帖拾遺」『田山方南華甲記念論文集』同論文集刊行會、一九六三年十月。
- 4、川崎庸之①「傳教大師消息」について『田山方南華甲記念論文集』同論文集刊行會、一九六三年十月。
- ②「最澄と空海―弘仁七年から同十二年にいたる時期を中心に―」『思想』第六三一號、一九七七年一月。
- ③「傳教大師と弘法大師との交友について」中野義照編『弘法大師空海研究』、一九七八年三月。
- 5、赤松俊秀①「空海と最澄の交際について」『佛教藝術』第五七號、一九六五年三月。
- ②空海と最澄の訣別について『密教學密教史論文集』、一九六五年十二月。
- ③「最澄と空海」『大谷學報』第五三卷第二號、一九七三年八月。
- ④「空海と最澄―高雄山寺をめぐる―」『佛教藝術』第九二號、一九七三年六月。
- 6、勝野隆信「比叡山と高野山―最澄と空海を中心として―」一九六六年十一月、至文堂。

7、高木神元①「空海と最澄の交友について」『高野山大學論叢』

第三卷、一九六八年三月。

②「傳空海書狀について」『ヴァーダ』第一二號、

一九六八年十月。

③「理趣釋」の請借傳承をめぐる若干の問題」『中川善教先生頌徳記念論集 佛教と文化』、一九八三年三月。

④「空海と最澄との交わり」『論集 日本佛教史』、

一九八六年六月。

⑤「弘法大師の書簡」一九八一年四月、法藏館。

⑥「圓澄和上受法啓狀」をめぐる若干の問題」『密教文化』第一九一號、一九九五年六月。

⑦「空海と最澄の手紙（改訂版）」一九九九年五月、法藏館。

8、秋宗康子「最澄と空海の往復書簡について」『大葉田淳教授退官記念 國史論集』、一九七〇年十一月。

9、小野勝年「空海・最澄交友考」とくに風信帖と久隔帖をめぐるについて」『龍谷大學論集』第三九四號、一九七〇年十二月。

10、眞保龍敏「理趣釋經等策子について」『智山學報』第二七輯（通卷四一號）、一九七八年三月。

11、飯島太千雄「尺牘に見る空海・最澄の交際の軌跡」『書品』第二六八號、一九八二年十月。

12、木内堯史「最澄と空海」同著『天台密教の形成—日本天台思想史研究—』、一九八四年四月。

13、上山春平「空海と最澄の交通—兩法師尺牘の背景—」『學叢』

第九卷、一九八七年三月。

14、佐伯有清「最澄と空海—交友の軌跡—」一九九八年一月、吉川弘文館。

15、西山 厚「最澄と空海の交流」『中外日報』第二五九四號、一九九九年八月。

16、武内孝善「空海と最澄の交友—訣別にいたる過程を中心に—」同著『弘法大師空海の研究』、二〇〇六年二月。

17、八木高秀「空海の生涯における精神及び社會活動の周期的變動—空海の病跡（雙極性障害との関連）—」『空海研究』第二號、二〇一五年三月。

付記。本稿は、二〇一六年六月十一日に開催された早稻田大學東洋哲學會第三十三回大會において行った、本稿と同題の講演に基づいている。

（キーワード）最澄・空海の交友曲線、理趣釋經、高雄の灌頂、密教受法の方法、密教觀の相違